

ドクター・オウ・
フィロソフィー・
都築忠七君の「一九世紀後半のイギリス社会主義思想」

「および運動の研究」に対する授賞審査要旨

都築忠七君は前後十数年、オックスフォード、ケンブリッジ、シェフィールド大学などに席を置き、戦後イギリス社会史への関心が高まる中で目ざましく発展したイギリスの労働運動史、社会主義運動史の有力な研究者に伍して研究を積んだ研究者であるが、三十余年にわたる同君の標題の研究（同君自身はそれを「ヴィクトリア朝急進思想研究」と名づけているが、内容をよりの確に示すために標題のようにした）は、つぎの四冊の英文の書物にまとめられ、第四冊目の刊行で一応の完成をみた。

- 1) H. M. Hyndman and British Socialism, Oxford University Press, 1961.
- 2) The Life of Eleanor Marx, 1855 - 1898; A Socialist Tragedy, Clarendon Press, Oxford, 1967. (日本語版『エリノア・マルクス ある社会主義者の悲劇』みすず書房、一九八四年)
- 3) Edward Carpenter, 1844 - 1929; Prophet of Human Fellowship, Cambridge University Press, 1980. (日本語版『エドワード・カーペンター伝 人類連帯の予言者』晶文社、一九八五年)
- 4) Tom Mann, 1856 - 1941, The Challenges of Labour, Clarendon Press, Oxford, 1991.

周知のように一九世紀末の四分の一世紀は、イギリスでは「大不況」の中で社会運動、労働運動に大きな転換の生

じた時期であった。すなわち、それまで主として熟練工を中心に組織され、クラフト・ユニオンの性格を強く持っていた労働組合にたいして、半・不熟練工をも包含した産業別組合Ⅱ「新組合」の結成がすすみ、大規模な労働争議がつきつきに行われるようになったこと、従来ドイツ、フランスなどに比して低調であった社会主義運動がにわかには活発になり、マルクス主義、アナキズム、土地社会主義などが大陸諸国やアメリカから取り入れられるとともに、一方ではフェビアン協会が組織されイギリス流の社会主義の形成がすすみ、他方では最初のマルクス主義政党といわれる「社会民主同盟」Social Democratic Federation（一八八四年）から労働党の前身の「労働者代表委員会」Labour Representation Committee（一九〇〇年）にいたるまで、さまざまの社会主義政党が結成されたことなどにそうした転換が示されている。

都築君の一連の仕事は、こうした動きの中にあつて、それぞれ個性的に活動をし大きな影響を及ぼした四人の代表的な人物の詳細な伝記を通じて、この歴史的転換に光を当てることを意図したものである。これまでも、この時代全般的情勢なり、各組織の運動の展開なりについて、総括的に、ないしはさまざまの組織体の活動に即して解明した研究は数多く与えられている。しかし、その中でリーダーシップをとった人物の個性や活動にもとづいて歴史的過程を具体的に解明するといった研究は、イギリスにおいても従来そう多くはみあたらない。そこにこの一連の研究の斬新さがあるということができよう。

やや立ち入ってみれば、第一のハインドマン研究はイギリスにおける社会主義政党の創始者の一人であるこの人物のトリー民主主義から社会民主連合の創立を経て労働党にいたるまでの思想遍歴を中心としているが、従来まと

まった研究のなかつたハインドマンについて、ほかならぬ日本人が本格的な研究をなしとげたことがイギリスの専門家によって高く評価され、今ではそれはイギリス現代史研究の基本的文献に加えられるにいたっている。

第二のエリノア・マルクスについては、これまでも何冊かの伝記が存在するが、きわめて特異な性格の持ち主であつた夫エイヴリングとの葛藤の中でマルクス主義の普及と運動の発展とのために献身的努力を払つたその生涯およびエイヴリングの異常さによって当時の社会主義運動が分裂・混迷を深めるにいたつたいきさつを、これほど生き生きと解明した仕事は他にみあたらない。本書はイギリスだけでなく西欧諸国でも評判になり、イタリア語訳（一九七二年）、ドイツ語訳（一九八一年）もあらわれている。

第三のカーペンターについては、一八七〇年代の急進運動にたいするかれの独特な影響についてだけでなく、きわめてユニークな詩人でもあり思想家でもあつたその全人格的な活動が克明に辿られている。ここでは社会主義の「人間化」「個性化」、性の解放、公害反対、工業化社会批判といった、現代にまで通ずるカーペンターの鋭い問題提起をあらためて受けとめようとする視角が特色をなしているといえよう。

最後のトム・マン伝は、以上の三研究の主題の背景をなす、当時のイギリスのいわば古典的な階級闘争の実態を解明することに中心を置いている。すなわち、ここでの中心のテーマは、総資本対総労働という対立の構図の中で総労働といった立場がいかにして形づくられたかを、その中心的リーダーであつたマンに焦点を置き、ティレット Benjamin Tillett、バーンズ J. E. Burns、ウィルソン J. H. Wilson など他のリーダーたちの動向にも目を配りつつ、実証的に明らかにすることにあるとみることができる。同時に、マンの運動の進展とともにこういう図式が崩れ、劣

働運動の性格がだんだん変化していく過程が、マンの思想的遍歴を辿ることによって明らかにされている。

要するに都築君の一連の研究は、イギリス流の伝記・人物史研究という伝統の上に立って、一方では四人の人物について詳細な伝記を完成したものであるが、他方、それを通じて、一九世紀後半のイギリスの錯雑した社会運動と社会思想の状況を説明することを試みた野心的な仕事である。その場合、この研究の学問的価値を高めている特色として、つぎの二点をあげることができよう。

(一)従来ほとんど利用されていなかった多くの書簡、日記、手記その他の資料を広汎に発掘し、それぞれの人物の内面にまで立ち入って思想、性格、行動を説明し、人物像を明確に浮かび上がらせていること。

(二)単なる伝記にとどまらず、それぞれの人物の思想、性格、行動様式などが関係した諸組織や運動にたいしてどういう影響を及ぼしたかを明らかにし、イギリスの社会主義および労働運動史に、今までみられなかったような視角から光をあてたこと。

都築君の一連の研究がイギリスをはじめ西欧諸国ですでに定評をえていることは、以上でも多少ふれたが、これらの書物がオックスフォードおよびケンブリッジのユニヴァーシティ・プレスという、もっとも権威があるとされる出版社から刊行されていること、最新刊のトム・マン伝も含めて、イギリスですでに多くの書評・紹介がおこなわれていることからそれが裏づけられる。

こういうわけで、同君の一連の研究は、多大の努力と長い年月とをかけて未知の資料を広く発掘し、それを丹念に利用して独創的な伝記研究にもとづく社会思想・社会運動史の研究に新生面を開いたこと、および外国人でありなが

らイギリスの近代社会史の研究にたいし本国人をも感嘆させるような寄与をしたことで、恩賜賞ならびに学士院賞に
十分値する仕事であると認定することができる。